

全労済協会 中央大学法学部公開講座

「福祉と雇用のまちづくり

～誰もが働き暮らし続けることができるまちづくりへ～

第8回 2022年6月8日

「農福連携で地域を支える」

特定非営利活動法人農スクール代表 小島希世子 氏

■「作る」「食べる」「学ぶ」、3つの柱を軸に野菜農家を運営

神奈川県藤沢市でNPO法人農スクールという団体を運営している小島です。農スクールでは、働きづらさを抱える生活困窮者や引きこもりの方と、人手不足の農家をつなぐ取り組みを進めています。

農スクールの話の前に、まず私自身の本業についてお話し、その後で農スクールの農福連携についてお話ししたいと思います。私の本業は野菜農家で、えと菜園という小さな会社を運営しています。えと菜園では、「作る」、「食べる」、「学ぶ」の三つの柱を軸に活動しています。「作る」は、農家として野菜を作る仕事です。農業というと普通は生産性を重視しますが、私たちはその逆で、少量多品種栽培に取り組んでいます。少ない資源でいかに生産するかを大切に、雑草や昆虫を活かし、それらが生命を終えて土に還り、土の栄養になってくれるのを利用しています。農薬や化学肥料は使いません。生産コントロールが難しいのですが、環境負荷が低く、生物多様性が豊かなところが特徴です。「食べる」は、熊本から食を届ける事業として、環境保全型農業に取り組んでいる農家直送のオンラインショップを運営しています。直送にこだわるのは、直接やりとりすることで単に商品とお金の交換ではなく、消費者に「これを生産しているのは人なんだ」ということが伝わりやすくなるからです。「学ぶ」については、農業体験サービスを行なっています。お客さんが会員になると、畑の中に自分専属の体験エリアを持つことができ、初心者の方でも年間20種類の野菜作りを学ぶことができます。参加者の目的は子供の食育、ストレス発散、レクリエーション、将来のUターンのためなど様々です。また、新人研修やチームビルディングなど、企業研修をさせていただくこともあります。

■将来を決めた、アフリカの飢餓の問題とホームレスの存在

私自身が農業を始めたきっかけについてお話しさせてください。私は熊本県の、友達の家がみんな農家というところで育ちました。私の親は教師だったのですが、友達の家に行くと牛がいて鶏がいて、友達はトラックに乗せてもらっていたりして、農家はかっこいいという憧れがありました。小学校2年生の時に、アフリカの子供達が飢餓で亡くなるドキュメンタリー番組をテレビで見て衝撃を受け、将来は食糧難を無くす仕事がしたいと思ったことが農業をやりたいと思ったきっかけです。

その後、大学に入学するために上京して、そこでまた衝撃を受けたのが、ホームレスの存在です。日本にも食べるものに困っている人がいるという事実、そしてそこに人がいるのにいないかのように振る舞う周りの人たちに、衝撃を受けました。友達に彼らはなぜホームレスなのかを聞いても意

見がバラバラです。そこでホームレスの方に直接話を伺うと「働きたいけど、住所も電話もないから働けない」ということでした。

こうした経験をしながら、自分は農家になりたいと思い、どうすればいいか農家の方々に相談すると、一様に「止めた方がいい」と言われました。そして、自分で価格が決められない、自分が作ったものが美味しいかどうかのフィードバックもなく黙々と作る精神的な辛さなど、いくつかの問題が見えました。

私は農業の卸業者、有機農業の組合などで働いた後に独立し、農家が自分で価格を決めることができ、直接消費者に販売できるオンラインショップを始めました。オンラインショップを始めると、農家の方々から人手不足の問題や、農村の空き家問題をよく耳にするようになりました。そこで、畑を通して、それらの問題、それからホームレスの方々の働く場所の問題を一気に解決出来ないかと考え、今の取り組みを始めたのです。

■農業を、食糧と職業にできる社会へ

当時の私がやろうとしたことは、とても一人で出来ることではない、国家プロジェクトのようなものだと言われました。ただ、出来る・出来ないで考えたら「出来ない」のフォルダに入れるしかありませんが、やるか・やらないかで考えれば、意思決定をするだけです。まずは小さく、3人のホームレスの方々と野菜作りを始めました。始めると意外な発見があったのですが、当時のホームレスの方は元々は建築現場の日雇いをやっていて、リーマンショックで職を失った方が多かったのですが、建築現場の機械と農作業の機械はとても近いのです。ホームレスの方は、農作業では即戦力となるとわかりました。ただし、いろいろな問題も起きました。特にホームレスの方だけではなく、生活保護受給者たちと農作業を始めると、彼らは路上のホームレスとはまた違って、働く意欲自体を失っていたのです。こうなると、いきなり働くよりも、自己効力感を高めるプログラムが必要だということになり、就農支援プログラムを作りました。

これは、野菜を作りながら自己肯定感を育て、適材適所を発見するプログラムです。農作業を細分化して、系統別に目標設定をして、導入編3ヶ月、基礎編3ヶ月を経て一般就労に向けた能力を開発していきます。

就農支援プログラムでは、実際に農家の現場に入ってもらいます。ホームレスの方も、引きこもりの方も、精神的に障害を持たれている方も、みんな同じ畑と一緒に農作業を行います。それぞれ背景が違うから「価値観」が変わりますし、お互いが違う中で例えば重たいものを持たなければならない場合や網を張ったりする作業などをすると「役割」が生まれます。そしてその中で「長所」が見つかるのです。

野菜を育てることは、自分自身を育てることです。ある引きこもりの方が、引きこもりになったのは自分の親やかつての上司のせいだと恨んでいたが、ホームレスの方と話してみると背景がまるで違うことがわかり、自分が間違っていると感じたと言っていたことがあります。畑では、目を合わせてコミュニケーションをとる必要はないですし、自分で一人になることもできます。自己開示がしやすい環境だということも関係があると思います。

就農支援プログラムは、一人ひとりに合った「適材適所」で、農業を食糧と職業にできる社会づくりに挑戦していきます。

<文責：全労済協会調査研究部>